

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	今 井 真 士
主 論 文 題 名 :				
単一政党優位の時代における権威主義体制 ——エジプト第一共和政の政党政治の制度分析——				
(内容の要旨)				
<p>本稿は、制度分析に基づく比較権威主義体制論の観点から、権威主義体制下の単一政党優位 (single-party dominance) の確立と、確立後に見られる与野党間の角逐と協力、そして、崩壊後の政党システムの変化を論じる。単一政党優位とは、複数政党選挙が実施されている状況において、単一の与党が少なくとも連立与党の中心として長期間に渡って全国レベルの執政府を支配するという状態を指す。このような事例は、世界中の様々な権威主義体制に見て取ることができる。権威主義体制下の単一政党優位はどのような条件下で確立するのか。単一政党優位という政党システムの下ではどのような与野党間の角逐と協力が見られ、その振る舞いはどのような条件に規定されるのか。これが本稿の大枠の問いである。</p> <p>また、このような一般的な問いに加え、個別事例として第一共和政以降のエジプトの政党政治にも着目する。エジプト第一共和政の与党・国民民主党は、1976年の複数政党制導入以降、1979年から2010年まで一貫して議会選挙に勝利し、2011年2月11日にホスニー・ムバーラク大統領が失脚するまで与党の座を維持した。エジプト第一共和政の政党政治は、野党勢力が一貫して弱く、与党が政治的優位の担保として警察や軍隊という非公式的手段を活用したため、政党間の競争は形式的なものに過ぎず、分析上大きな意味を持たないと思われがちである。</p> <p>しかし、そうした状況に見られる政党システムの動態は、権威主義体制下の単一政党優位に関する様々な問いを想起させる。すなわち、そもそも国民民主党が単一政党優位を確立できたのはなぜか。国民民主党が議会で圧倒的な優位を占めつつ、それでも（一部の）野党に協力を求めたのはなぜか。野党勢力の中でムスリム同胞団と世俗野党は、政治改革要求では協調しつつも、なぜ議会選挙に限って戦略的な協力を避ける傾向にあったのか。そして、国民民主党政権の幕切れが政権交替による民主化ではなく政権崩壊による体制変動という形になったのはなぜか。さらに言えば、2011年の「アラブの春」以降、ムスリム同胞団はムハンマド・ムルシー大統領を首班とする自由公正党政権の樹立によってエジプト第二共和政において単一政党優位を確立すると期待されたが、実</p>				

際には優位を確立することなくわずか1年で政権崩壊を余儀なくされた。それはなぜなのか。本稿では、近年のエジプト政治の論点として特に注目を受けた、この国民民主党と自由公正党の両極端の政治的帰結を権威主義体制下の単一政党優位の成功例と失敗例として対比する。

各章の要約は以下の通りである。第2章では、本稿の議論全体の前提として、単一政党優位が論理的に生じうる事例群（領域）を設定し、政治体制の時代的趨勢と理論的系譜を追い、権威主義体制下の単一政党優位の事例群を提示する。Cheibub, Gandhi, and Vreeland (2010)のデータセット（1946年～2008年）に基づくと、政治体制の時代的趨勢に関して3つの傾向を見出すことができる。すなわち、①政治体制全般の事例群の中では権威主義体制は減少傾向にあるが、1980年代後半以降、②権威主義体制の事例群の中で少なくとも実質的に複数政党制を認める事例が増大傾向にあり、さらに、③その事例群の大部分に単一政党優位が見られる、という傾向である。こうした時代的趨勢に合わせて発展した政治体制研究の理論的系譜を辿る。最後に、優位政党の様々な定義と操作化を整理し、最小限主義的定義に基づいた権威主義体制下の単一政党優位の見取り図を提示する。

第3章では、権威主義体制における単一政党優位の確立過程を論じる。ここで取り上げるのは「複数政党選挙を実施する権威主義体制の中で単一政党優位が確立した事例と単一政党優位が確立しなかった事例があるのはなぜか」という問いである。筆者はこの問いを説明するために、複数政党制導入前の支持基盤の構築と複数政党制導入後の「優位の好循環」に着目する。与党勢力が複数政党制導入前に支配エリートの利害調整機能と民衆の動員機能を発達させ、自らに有利なタイミングで制度変更できたかどうかは、複数政党制導入後初めての議会選挙の帰趨を大きく分ける。与党がその2つの機能を備えていれば、その議会選挙で大多数の議席を獲得しやすくなる。こうした政治的優位は公共資源の政治利用（すなわち、経済的優位）を容易にし、その結果、体制は長期的に存続しやすくなる。この仮説は、短期の重大局面と長期の経路依存（自己強化過程）という歴史的制度論・比較歴史分析の枠組みに基づくものである。とりわけ、権威主義体制の長期的分岐の経路として、当初から複数政党制を導入した場合と途中から制度的単一政党制から切り替えた場合という2つの文脈を想定し、それぞれ、①優位政党化（単一政党優位の確立）と、②不安定化（単一政党優位の非確立）という2つの経路を提示する。各経路に該当する事例を概観し、制度的単一政党制から複数政党制へと切り替えた場合の「成功例」としてエジプト第一共和政の政党政治（1952～2000年）を論じていく。

第4章では、単一政党優位が体制変動に与える効果を論じる。ここで取り上げるのは「単一政党優位が確立した事例は単一政党優位が確立していない事例と比べてどの程度

体制変動しにくいのか、そしてどの程度民主化しにくいのか」という問いである。筆者はこの問いを説明するために単一政党優位を4つの側面（与野党間の競合性、与党勢力内の競合性、支配エリートの組織的基盤、政権の長期性）に分け、それぞれの側面が体制変動に与える因果効果を統計分析によって検証する。その結果、権威主義体制は、①与党勢力全体の議席占有率が高いとき、②与党勢力の中で1つの政党が優位を占めているとき、③文民が執政代表者を務めているとき、④政権を長く維持しているときに民主化しにくい、ということを示す。

第5章では、単一政党優位が確立した状況における与野党間の合意形成の効果を論じる。ここで取り上げるのは「議会で圧倒的優位を占めている与党勢力がその常設の審議の場と並んで特設の合意形成の場を設置し、野党勢力（の少なくとも一部）の参加を求めるのはなぜか」という問いである。筆者はこの問いを説明するため、与党勢力が議会という常設の審議の場ではなくわざわざ特設の合意形成の場を設置する動機と、その協議の参加者と設置期間の違い、すなわち、制度設計の違いによって政党政治に異なる効果が生じることに着目する。参加者の規模が小さいほど、野党勢力の分断（分割統治）としての機能が強く働き、規模が大きいほど、その機能は弱くなる。また、設置期間が短いほど、与党勢力の当初の目的通りの効果を発揮しやすく、設置期間が長くなるほど、与党勢力の目的とは異なる効果が生じやすくなる。この章では、この2つの側面の組み合わせの違いの実例として、エジプトの政治制度改革関連法に関する「国民対話」（2005年）、憲法修正に関する立法憲法委員会の「小委員会」（2007年）、そして、イエメンの選挙法修正に関する「国民対話」（2007～2010年）のそれぞれの政治過程を取り上げる。

第6章では、単一政党優位が確立した状況における野党勢力の選挙前連合の形成を論じる。ここで取り上げるのは「与党勢力が圧倒的優位を占めている状況で野党勢力はどのような条件下で選挙前連合の形成に意欲を示すのか」という問いである。筆者はこの問いを説明するため、与野党間の競合性、野党勢力内の競合性、選挙制度、執政制度という4つの変数に着目し、それぞれの変数が選挙前連合の形成に与える因果効果を統計分析によって検証する。その結果、野党第一党は、①野党勢力全体の議席占有率が高いとき、または、②同じような規模の野党が多いときには議会選挙で選挙前連合を形成しやすいが、③野党勢力全体の議席占有率が高く、かつ、同じような規模の野党が多いとき、④選挙制度で小選挙区制が採用されているとき、⑤執政制度で大統領制が採用されているときに選挙前連合を形成しにくい、ということを示す。また、この議論の因果メカニズムを追跡するため、エジプトの2005年と2010年の人民議会選挙を取り上げる。重要なのは、小選挙区制・大統領制の場合、選挙前連合を形成することは与党

勢力との直接対決の矢面に立つことを意味するため、野党第一党は他の制度配置と比べて選挙前連合の主導を避ける傾向にあるということである。

第7章では、単一政党優位崩壊後の政党システムの変化を論じる。ここで取り上げるのは「単一政党優位の崩壊後、新体制をめぐる旧体制の支配者と主要野党との角逐はどのような政党システムを形作るのか」という問いである。筆者はこの問いを説明するため、暫定政権という特異な状況における旧体制の支配者と主要野党の双方の（一見すると）自制的な行動に着目する。旧体制の支配者は、暫定統治の正統化と既得権益の維持を図るため、各党に対して政策協議の提案という（一見すると）中立的な行動を取りやすい。それに対して、主要野党は、次期与党の最有力候補として穏便かつ着実な権力の最大化を図るため、各党に対して包括的な利害調整という（一見すると）協調的な行動を取りやすい。その結果、単一政党優位の崩壊後に生まれた様々な政党は、この両陣営の綱引きを受けてどちらかの陣営へと凝集しやすくなり、多極化でも一極化でもなく政党間での分極化が生じうる。この一連のメカニズムを論証するため、第一暫定政権期のエジプトの事例を取り上げる。

第8章では、本稿の結論として、各章の議論の整理と今後の研究の方向性を提示する。特に、各章の知見を活かし、2012年以降の第二共和政において、ムルシー大統領を擁する自由公正党政権が国民民主党と違って単一政党優位を確立できなかったのはなぜか（そして、2014年以降の第三共和政において、スィーサー大統領は第一共和政のような単一政党優位を確立しうるのか）という点に若干の考察を加え、本稿の議論を締め括る。

最後に、巻末付録として、政治体制・支配連合に関するデータ・操作化の基準と政治体制一覧、独立変数・従属変数・制御変数（第4章と第6章）の操作化の基準とデータの記述統計、各章のエジプトの事例研究で扱う歴代憲法・法律・政治文書、そして、第一共和政以降のエジプトの主要政党の変遷と年表を収録した。